

# 森田家三代のきもの

——明治・大正 粋いきのおもかげ——

保坂和子

はじめに

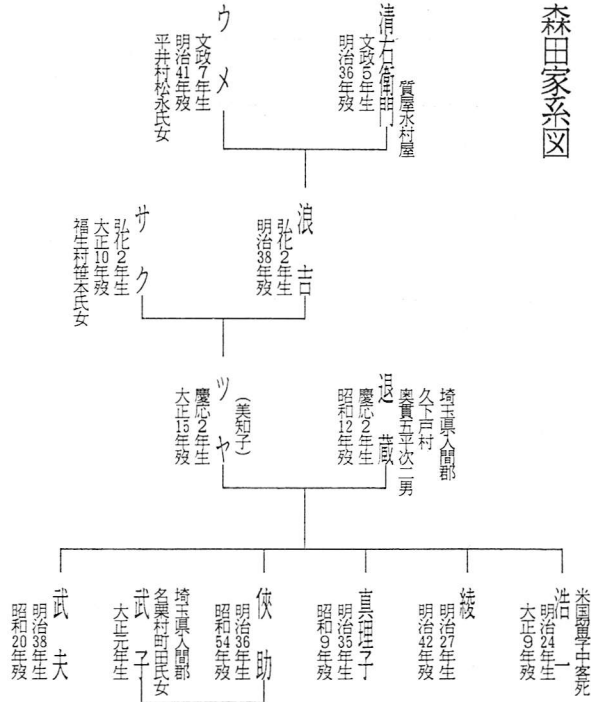
平成二年から五年にかけて、森田家（当主森田豊氏・武蔵野市在住）から、大切に保存されていた衣服一五七点が福生市に寄贈された。それは幕末から明治・大正にわたり森田家で着用された貴重な、きもの類である。しつけをかけたままの手を通さないものも多くあり、大部分がハレ着やよそゆきに類するもので、その粋な美しさには目を見はるばかりである。またきもの移り変わりもよくあらわれていて、極めて価値のあるものと思われた。

私ども「地域の生活文化を考える会・ゆずりは」は、この衣服の保存と管理に当たる福生市郷土資料室から依頼されて、平成二年二月から調査を始めた。以来三年余り、この程はば調査を完了することができた。そこで郷土資料室の主催で「時代を翔んだ多摩の女性、森田美知子のきもの」

というテーマで、本年二月二日より三十五日間、企画展を開催することができた。寄贈された一五七点の内、一一〇点余りを展示して、市民の方々はじめ多くの方に見ていたいたのである。

この衣服の調査の中で、企画展のテーマにもなった森田美知子については、美知子の次男俠助氏の夫人武子氏（大正元年生まれ）に何回かお話を伺い、聞き書きをさせていただいた。その中で女性のきもの大部分が美知子のものであり、また美知子は多摩には稀な知的で先駆的な大変魅力あふれる女性であることを知った。そこで明治・大正に栄えた森田製糸の財力を背景に調えられたきものを着こなした美知子にもふれ、森田家三代のきものについて考えてみたのである。

# 森田家系図



## 森田製糸と森田美知子

森田家は熊川村（現福生市）の旧家で、美知子は慶応二年（一八六六）父浪吉、母サクの長女として生まれた。始めの名はツヤといった。浪吉は先見性のある事業家で、明治六年（一八七三）に妻サクとともに村で最初に製糸を始めた。明治維新後、新政府は殖産興業を国是とし輸出産業

である生糸の生産に力を入れ、明治五年には群馬県に国营の富岡製糸場を設けた。浪吉はこうした時代の動きをいち早くとらえたのであった。翌七年には座繰りを五〇釜にふやし、横浜の生糸輸出業者に直接売却するなど、新しい流通の道を開拓している。その後十一年（一八七八）には器械製糸を導入、森田製糸所を創立した。森田製糸所は多摩地域における製糸業の先駆的な存在であった。

このような父と文明開化の時代の影響もうけて、美知子は好奇心と向学心に燃えた少女に成長していった。弟妹にめぐまれず一人娘であった。父は新しい時代には女も学問が必要と考えたのであろう。十三年に村の小学校を卒業すると、二年後に府中へ、続いて東京に遊学させる。このころ塾の多かった神田猿樂町（千代田区猿樂町）に下宿し、水原未瑳子について和学を、また待望の英語も学んだ。

当時は鹿鳴館時代といわれ、欧化思想が一世を風靡していた。華やかな舞踏会が行われ、その洋風のファッションは若い人々の憧れであった。美知子は貴婦人たちの着たバツルススタイルのドレスを注文し、着用している。このドレスは江戸東京博物館開館時の鹿鳴館時代コーナーのメイ

ン展示として人気を集めたという。

このころツヤという名を艶としたが、さらに美知子に改めた。美知子という名の響きに新しい時代が感じられる。

また彼女は明治二十年（一八八七）ころから高まった女性解放の風潮に共鳴し、廃娼運動にも力を入れた。そして「芸娼妓全廃論」を書いており、その草稿の一部が残されている。

この遊学中に美知子は、東京専門学校（現早稲田大学）の学生奥貫退蔵と知り合う。二人は熱烈な恋愛の末明治二十年に結納を交わし、その後、退蔵の学業修了をまって、二十二年に熊川で盛大な結婚式をあげるのである。退蔵は森田家の養子となり、二人で家業の製糸業に従事することになった。

この間、森田製糸は二十三年に二〇〇人取り、三十五年（一九〇二）には四〇〇人取りと工場施設が拡張され、東京でも最大手の製糸工場として発展していった。



美知子 10代のころ

退蔵は家督を相続した三十年（一八九七）に福生村熊川村組合村々長に就任、さらに三十二年には東京府会議

員に選任されるなど政界にも進出する。次いで三十七年には東京府農工銀行監査役に就任するなど数々の要職につき、地方政財界のリーダーとしての地歩も固めていった。東京での活躍が多くなり、大正八年（一九一九）には麻布六本木に森田家の東京の屋敷を設けている。

浪吉は明治三十八年（一九〇五）に死去。美知子は五人の子供を育てながら留守勝ちな夫に代って、森田製糸の経営に力を尽していた。退蔵はその後大正五年には農工銀行



森田家の人びと

の頭取をつとめるなど東京での活躍はめざましく、これらは森田製糸の発展にも大きな力となった。また製糸業界を代表しての役職は製糸業界の期待を担うものであった。

森田家の最盛期には熊川小学校や立川にあった府立二中（現



美知子と子どもたち

立川高校)に校舎などの建築資金を寄付したり、赤十字社や済生会(注1)などの慈善事業にも多額の私財を拠出している。

このように財力にはめぐまれていても、子どもには不幸が続き、長女の綾は十五歳で病死する。期待した長男浩一はアメリカ留学中に大流行したスペイン風邪にかかり、大正九年(一九二〇)に客死した。三十歳の若さであった。

一方、順調にみえた製糸業界も、第一次大戦を契機に陰りが見えてきた。昭和大恐慌の前兆は製糸業にもひそかに忍びよっていた。美知子は永年経営した森田製糸の終幕という悲劇的な出来事に遭遇することなく大正十五年(一九二六)病を得て六十一歳で世を去った。

美知子の没後、事業は不安定要素を含みながら継続されていった。しかし昭和二年(一九二七)の金融恐慌に直撃され、五月に株式会社組織を変えたが、時すでに遅く昭和四年七月、会社は銀行の手に移り、森田製糸株式会社は多摩製糸株式会社と改称されて、経営は大手の片倉製糸株式会社に委任された。明治初期から東京地方有数の製糸業として栄えた森田製糸所も遂に幕を閉じることになるのである。

森田退蔵は昭和十二年(一九三七)に森田家の別荘(現幸楽園)で亡くなった。享年七十二歳であった。

### 森田家三代のきもの

幕末から明治・大正と森田家三代、七十年にわたって着られたこれらのきものは、古いものを除いて大部分が森田家全盛期のものである。調査の結果、ほとんどが三井呉服店(明治三十七年より三越呉服店と改名)で求められている。一部既製品に松屋と白木屋(現東急百貨店日本橋店)製がある。ウチオリ(自家で織ったもの)はなかった。したがって布地、柄、流行などは東京のモードであるといえる。特に三越は明治の末から流行研究会をつくり、その中心的存在であった。ハレ着やよそゆきは、呉服を扱っている専門家も認める高級品である。

調査はきものの戸籍に当る基本カードを作ることから始めた。衣服名、着用者、用途、着用季節、さらに地質や布名、柄などを記入した。この中で判断に苦しんだのは布名であった。例えば縮緬(ちぢめん)でも産地や時代によって違いがあって、布名も異なるのである。そこで福生市に大正八年(一九一九)、最初に開業したI呉服店の番頭であった高水利次氏にご協力いただき説明することができた。長い実践できたえられた知識と経験は非常に貴重であった。私たちが広く深くきものを見る目を養うことができ感謝にたえない。カードにはそれぞれのきもの全体とその特色ある部分の写真を添付した。

基本カードにより、ごく簡単に整理して一五七点の衣服類の一覧表を作成した(文末に掲載)。

次にこれら明治・大正のきものが語る、その特色をまとめてみることにしたい。

森田家のきものの美を「粋<sup>いき</sup>」ととらえてみたが、粋とは「つう」(通) などとならんで、江戸文化の一面をあらわすことばである。粋とは九鬼周造がその名著、『いきの構造』で、「運命によって諦めを得た媚態が、意気地の自由によって生きるのが(へいき)である」としている。粋は意気地を基調とした「つう」(通) なども合わせた美意識であるということもできるであろう。

粋、それは野暮<sup>やぼ</sup>に対して、気がきいて風流なことであった。男まさりの美知子の生涯を重ね合わせると、粋はまことに「いきいき」とそのきものに脈うっているのである。

### 粋のおもかげ

○織り染めにみる美しさ

織りの技術がそれ程発達していなかった幕末から明治は縞物<sup>しまもの</sup>が多かった。千筋、万筋といわれる江戸時代からの細かい縞物も森田家のきものに見られる。縞物はあらたまった場所にも着て出られるので「嫁にやる時は縞の重ねを持たしたい」というのが親心で、娘がいる家では早くから心づもりをしたという。先年の民俗調査でもよく聞かれた話である。森田家でも絹の上等な織りの縞のきものも目立ち、

また端ぎれにも三十種以上にのぼる縞布が残されている。それぞれに色づかいも美しく、明治末から大正にかけて流行したエンジの入った縞はモダンで現在にも生かせる縞柄である。

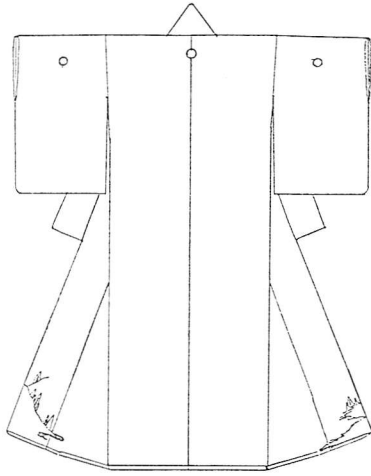
江戸小紋は緋入のきもの(三二)に一点、端ぎれに数点みられるが、いずれも落ち着いた色調で品よく美しい。胴抜きの友禅模様(四七)の赤のあざやかな色彩は、はるかな明治のものかと驚くばかりである。

江戸褌の裾模様は黒のお召と、消し炭色(鉄色)の入った納戸色)の小浜縮緬<sup>縮緬</sup>の二点があるが、いずれも美知子五十代の大正のころのものである。裾模様の刺繍は明治調のひかえ目な、渋く落ち着いたものであるが、デザインにモダンな雰囲気があり、色調も品よく仕上げられている。黒地もただの黒でなく、赤で下染されている。今回寄贈の中で最高級のものであろう。

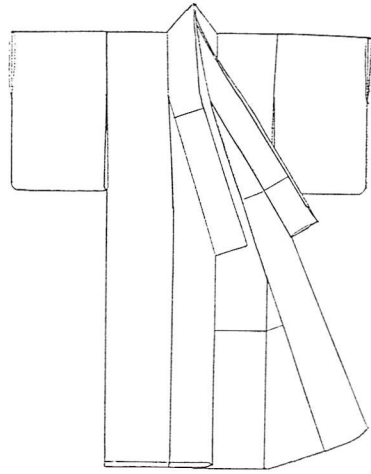
○粋とは秘められた華やかさ

明治のきもの表地は若い女性のものでもすべて地味で、渋く落ち着いた色調である。しかし裏をみると、胴裏にはピンクの節絹<sup>せんぎょ</sup>、裾廻<sup>すそまわ</sup>しにはブルーの富士絹、そして袖の振りには、あざやかな朱の紅絹<sup>べに絹</sup>という大胆な色づかいがされている。

黒の江戸褌の重ね<sup>三九</sup>の下着には、胴抜きに白地にオレンヂ色とブルーで大きな扇面を描き、さらに渋茶を配すなど人



(後)



(前)

重ね式服上着 (黒裾模様お召)  
(美知子着用 大正期 No 38)

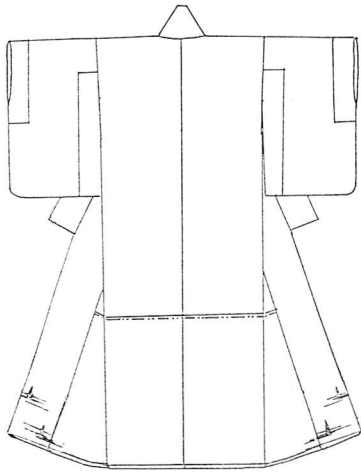
目をひく美しい羽二重がつかわれている。着ている姿からは全然目にふれない下着に華やかな布地を使う、これが粋であり、おしゃれであった。

同じ意味での粋が、女物の胴抜きに見られる。胴抜きとは、きもの下着で裾布や袖口は表布をつかい、胴布の部分を別布で仕立てるものである。よそゆきのきものに重ねの下着として明治のころはよく着られたものである。胴抜きの下着は五点あるが、いずれも胴の部分に明るい友禅や赤やオレンジ系の絞りなどが用いられ、鮮やかである。

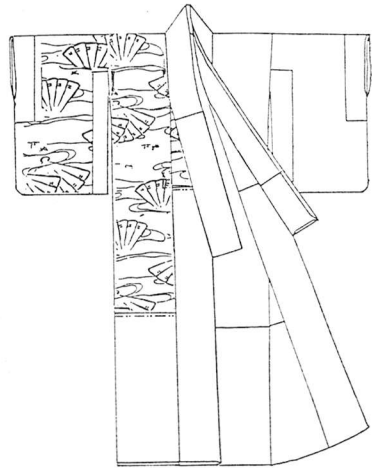
胴抜きの下に着るのが、長じゅばんである。これも紅絹裏のついた美しい友禅模様や小紋染めで仕立てられている。

羽裏(羽織の裏)にも粋がのぞく。黒紋付の羽裏は男物も女物も凝っていて、大正十二年(一九二三)に流行したというモダンなサラサ模様が描かれている。謡曲の図柄の羽裏は美知子のもので大正初期に好まれたものである。

表に出ない秘められた美しさに粋を求めたことがわかる。和服は長方形の布の集合でできており、体に合わせて着る。洋服は体に合わせて作るものである。したがって、和服は歩く姿に衿の裏布の美しさをみたり、脱ぎ着のしぐさに美を求めたりする。またきものは脱いだ後、すぐ畳まず衣桁にかけて風を入れてからしまうものとされた。秘められた華やかな部分も衣桁にかけられて、地味な表地と対象的な鮮やかな姿を見せることもあった。秘められた華やか



(後)



(前)

重ね式服下着 (胸抜は羽二重)  
(美知子着用 大正期 No 39)

さも表現の場をもっていたといえるが、あくまで表には出なかつた。

○半襟にみる粋

今回寄贈された中に二十三種の美しい半襟がある。縮緬、錦沙、紋綾子などで、夏物にはたて組とよこ組がつかわれている。いずれも美知子、大正期のものである。

色調は茶系がやや多いが、藍、うぐいす色、てつ色、紫、グレイ系などさまざまである。模様は染めだけのものは二点で他は手でていねいに刺した刺繍入りで、ラメ入り(金糸銀糸を織りこんだもの)もある。高水氏によると現在でも最高の織りの半襟と折紙付の紺無地のものもあり、またチヂラ織りという珍しい一点も含まれている。

その中で参円七拾八銭の正札のついた、うぐいす色の一点があった。大正十一年(一九二二)の日雇労働者の賃金が二円<sup>注</sup>十八銭であるから、現在の値段にすると約一万五千円位であろうか。ともかく当時の高級品であったことがわかる。

きものの表地が地味であったことから、明治・大正の粋は半襟で表現された。襟元に見える半襟はきもの姿のポイントで、好みや年齢もここに反映されている。半襟に凝っているので、半襟をかなり出した着方をした。これらの半襟の生まれた大正時代は、色彩も豊かになりデザインも漸新なものが目立つようになる。美知子の写真に見られる茶



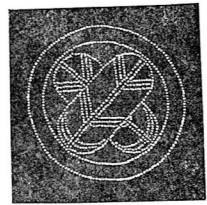
大正のころの美知子

に麻の葉を幾何学模様風に刺繡したデザインは、現在でも生かせるモダンなものである。また黒地にエンジと白で蘭を刺繡したものは、私たちに大正ロマンの時代を語りかけているようである。

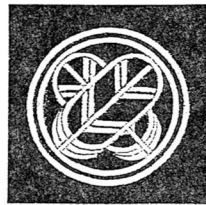
○着こなし

襟元に半襟を多く出して着るので、襟をゆったり合わせで着る。若い人も帯を胸高にしめないで、楽な着方をしている。

美知子十代の古い写真を見ると、黒襟が掛けられていて粋である。きつと袖口にも黒じゆすがのぞいていたと思う。写真を撮るといってハレの日に、若い女性も黒襟がおしゃれの表現であったことがわかる。またお端折をしないで裾を引いている。女子がお端折をして着るようになるのは、明治中期ころからであるといわれている。ふだん着は対丈



縫い紋  
(No 60)



陰紋  
(No 61)



陰紋  
(No 54)

(着丈の長さ)であった。

森田家の明治中期ころまでの写真を見ると、女性は手袖口の中に入れていて手を見せない姿をしているのも興味深い。

○小さなおしゃれ 陰紋(かげもん)

礼装や式服に紋付は欠かすなかつたから、森田家のハレ着にも五つ紋、三つ紋などの羽織やきものが数多く見受けられる。

紋付は染め抜きの紋(抜き紋ともいう)が正式で、これを表紋という。これに対して略装の場合、特に女性は縫い紋や陰紋が用いられた。縫い紋は縫い方の違いで、微妙な変化がやさしい雰囲気であらわされ、女性の略装に普及した。陰紋は細い輪郭線で紋を描くもので、女性や伝統芸能にたずさわる人が用いたという粋な紋である。

美知子の羽織につけられている陰紋は三つ紋で、三点あ



る。それぞれタカノハの描き方が少しづつ違い、なかなか女らしい描かれ方で、おしゃれである。お茶席や謡などの時に着られたのであろうといわれている。

### きものにあらわれた移り変わり

○厚着から薄着へ

森田家三代七十年間のきものは、綿のたっぷり入った綿入れから、真綿が薄く入った引き綿入れ、そして綿の入っていない<sup>あわせ</sup>袷と三種類に分けられる。

もめん綿が庶民に用いられるのは幕末からで、それまでは綿といえば真綿のことであった。維新後、外国からもめん綿が輸入されるようになり、値段も安くなったが、まだまだ貴重品であった。しかし寒い冬を暖かく過ごすことのできる綿入れのきものは、生活が落ち着いてくると、たちまち普及していった。

(一八九)

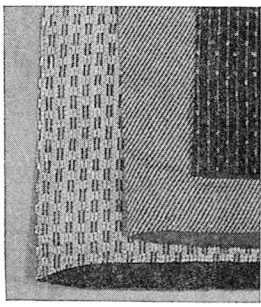
森田家では男子の重ねの下着にも薄綿が入れられている。綿入れは豊かな暮らしの象徴であったかもしれない。しかし明治も後期になると、下着の発達や、女性はお端折<sup>はじり</sup>のスタイルの悪さから敬遠されて、老人や子供を除いて成人用は、真綿を薄く引くだけの引き綿入れとなっていた。もめん綿は切れやすいので、真綿を引いてしっかりさせ、布と綿をなじませていたが、欠点は布目を通して真綿が表に出る。さらに摩擦で毛玉ができることであった。これを防

ぐため、毛玉が表に出ない「吹き留め真綿」が工夫された。丁度、引き綿入れが着られるころに当る。

「吹き留め真綿」は羽織やきもの型にそれぞれ出来ていて大変入れやすく作られている。三越呉服店の畳紙<sup>たたし</sup>に包まれた未使用のものが残され貴重である。

大正になると引き綿も入らない袷となってゆが、裾や袖口に重みや厚みを出すために入れる含み綿に、綿入れのころの名残をとどめている。

綿入れから袷への変化は、袷の大きさによくあらわれている。袷と裾の出袷<sup>で</sup>が、綿のたっぷり入った古いものは、三センチメートルもあって立派に見える。引き綿入れになって、裾に含み綿の入ったものは一センチから一・五センチメートル、袷になると裾芯<sup>しん</sup>が入っていても〇・五センチになっている。袷の大きさを比べてみることで、この移り変わりがよくわかる。



三種(つま) 袷

### ○三枚重ね

福生市の民俗調査でも「花嫁衣裳は三枚重ねが正式なんだよね」とはよく聞かれたことであった。明治の初めに女子の礼装として新政府から示されたのも、黒縮緬、染め抜

き五つ紋付裾模様の二枚に白羽二重の下着の三枚重ねである。その後二枚重ねに簡略化されたのには地域差もあるが、明治の末から大正にかけてであるという。昭和になってから、下着につけた比翼を表着につけて、さらに着やすくなつた。

森田家の古い胴抜き(四五)に比翼仕立の下着があつて、三枚重ねのころの面影をとどめていて貴重である。裾、袖口、振りが比翼になっている。一反をつかつて比翼にしているの、裾布が短く仕立てられている。布を有効に使っているのにも時代があらわれている。

#### ○紅から白へ(胴裏にみる変化)

明治のころの女物の絹のきものの胴裏には、ほとんど紅絹が使われている。(一五・二七・二八・三二・三三・三四・三五)

紅絹とは紅花で染めた薄手の絹布で、古くから小袖や長じゅばんの裏などに用いられた。紅(赤)色は魔を除けるという信仰が昔からあるためであつた。普通、うこんで黄色に下染めした上に紅色をかけ、緋色ひに染めあげた。この伝統がずっと続いていたのであつた。地味な表地に対して紅絹の華やかな紅は美しかった。紅絹の欠点は汗をかくと色が落ちて汚点になりやすい点であるといい、表地が派手な明るい色彩になってきたこともあつて姿を消していった。胴裏に白絹や薄い色彩のものが、若い人のきものにも用い

られるようになる。美知子の衿には袖裏に紅絹を使い、胴裏には白というのが(二二・二三・二四)三点あり、変化の段階を示しているかもしれない。変化は大正から昭和の始めであろう。

#### ○白から黒へ(喪服にみる移ろい)

西多摩地方では戦前まで女性には、近親者の葬儀の場合、白の喪服を着た。昭和十二年(一九三七)、舅にあたる退蔵の葬儀の時に森田武子氏も白を着たといわれる。福生市の民俗調査でも同様で、多くのお年寄りが嫁はご祝儀に着た花嫁衣裳の黒のヒッカエシの下着の白を着たと証言している。帯も白で、寂しい姿でいやだったという人もあつた。

大正十五年(一九二六)に亡くなった美知子のきものには、羽二重の黒の喪服が残されている。大正六年には麻布に東京の立派な屋敷を造った森田家であるから、東京の生活では黒の喪服が必要であつたと思われる。事実大正四年(一九一五)皇室令八号で制定された(『大正のきもの』による)宮中参内の礼装の喪服は「黒無地紋付(地紋も紋様もないもの)下着は白、履物黒草履」とあり、これは喪服のあり方の大きな指針となつたと思われる。福生市で白が黒になるのは戦後で一般的になるのは昭和二十五年を過ぎからである。なお「戦時中、靖国神社で戦死者の祀りこみがあつた時は、黒を着るようにいわれて、みんな黒のヒッカエシを着ていった」(市内加美清水キヨ氏)という話も聞かれ、このような流れの中で黒の喪服は地域に定着して

いったのであった。

## おわりに

今回寄贈された一五七点の衣服類が貴重である所以は、各家々から集めた豪華な一点ものの集大成ではなく、幕末から明治・大正と森田家三代の暮らしの中で着られ、伝えられたものであることである。一つ一つのきものに、時代を生きた人生があり、肌のぬくもりがある。

これらのきものの粋な美しさも、きものの移り変わりもこのような基盤の上にとって考察することができ。福生市域の暮らしにもふれて、思いは大きくふくらむのである。

また数々のきものは、最盛期の森田家の財力のすばらしさを物語っているが、また数には入れられていないが、洗い張り品や端ぎれに、いたんだ布を丁寧に繕った布の数々がある。豊かな暮らしの中でも、やはり布は貴重品で大切に扱われ、繰りまわされていた。これらの布は明治大正の人々の心を語りかけているようである。

今回の調査にあたって、度々お伺いしていろいろお話を聞かせて下さった森田武子氏に心から感謝申し上げます。また子息の春樹氏にも大変お世話になった。高水利次氏には布地などの面でご指導いただいた。

なお市史編さん室からも資料提供いただき、より確実な報告ができたのである。あわせて心から感謝いたしたい。

調査に当たった会員は、始め八名であったが、最後まで調査にかかわったのは、私その他、山崎ヨシ江、森田節子、浅井薫の三名である。それぞれの特性を生かして協力し調査をおえることができたのであった。

注1 済生会 恩賜財団済生会の略称で明治四十四年（一九一一）に明治天皇の御下賜金を基金として発足した。昭和二十七年福祉法人に改組、全国に八十余の医療施設を有している。

注2 漢数字は「森田家寄贈衣服一覧表」の最上部に書かれた数字である。以下同じ。

注3 週刊朝日編『値段の明治・大正・昭和風俗史』上六〇七ページ。

## 参考資料

昭和女子大学被服学研究室『近代日本服装史』昭和四十六年

## 刊

民族衣裳文化普及協会『大正のきもの』昭和五十五年刊

（ほさか・かずこ 地域の生活文化を考える会）  
ゆずりは会員 羽村市在住

森田家寄贈衣服一覽表

(平成六年一月現在)

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
性別	女	物																		女		
衣服名	単衣きもの																			裕きもの		
表地名質	木綿																			お召		
用途	ふだん着																			ちよいちよい着		
着用者	美知子																			美知子		
特色など	乱れ格子の浴衣、古いもの 朝顔の絞り浴衣、 藍染のかすり、広襟の裏メリンス 藍染の桶しぼり、 藍染のかすり、 絞りの浴衣 " 絞りの浴衣 織りかすり バチ襟、撚り強く麻風仕上げ 型染のプリント 袖口布、襟裏、紹縮緬 上布、藍染のかすり 広襟の裏、紹縮緬 縮(ちぢみ)の浴衣 千筋か? 広襟の裏は赤 型染(化学染料使用) 久留米がすり、藍染上等品 柄は乱れ格子 袖口布は紹縮緬 小紋染 広襟の裏はトキ色平絹																			袖口布は黒じゆす 袖裏紅絹、すそ綿入		

48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	
物											物											物				
女											女															
"	"	"	胴抜き下着	単衣白下着	"	重ね下着	江戸褌(鉄納戸色)	喪服	"	重ね上着(黒)	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	綿入きもの	"	"
お召	浜縮緬	江戸小紋	錦紗	平紹	"	羽二重	浜縮緬	"	お召	お召	銘仙	紬	"	お召	紬	縮緬小紋	伊勢崎がすり	お召	伊勢崎がすり	"	お召	紬	唐棧縞	お召	紬	
"	"	"	ハレ着(よそゆき)	"	"	"	"	"	ハレ着(式服)	"	"	"	"	"	"	よそゆき	ちよいちよい着	ハレ着	ちよいちよい着	"	よそゆき	ちよいちよい着	ふだん着	よそゆき	ふだん着	
美知子	"	"	サク・美知子	サク	"	"	"	"	"	"	"	美知子	"	"	"	サク	美知子	"	"	"	"	"	美知子	サク	"	
"	花柄友禪、袖口布黒じゅうす	赤友禪、	胴抜きは桶紋り、裾ふき三 cm	夏式服の下着、夏の喪服か?	引き綿入、裾綿入	三枚重ねになる白下着	五つ紋(黒羽二重)	三つ紋、褌にもみじ刺繡	祝儀用(略式服)縫い紋三つ	"	裾ふき三 cm、古い、未完成	"	一・五 cm	裾物でハレ着にもなる	裾ふき二・五 cm	裾ふき二・五 cm	万筋、胴裏は白絹、	袖口布メリンス、裾ふき〇・七 cm	袖口布黒じゅうす、裾ふき二 cm	"	"	"	古いもの、裾ふき一・五 cm	袖口布黒じゅうす、裾ふき一・五 cm	袖裏紅絹、袖口、襟に黒じゅうす	袖裏白絹、袖口、襟に黒じゅうす

72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	
女							物					女					物	女						
半襟	半じゅばん	"	"	袷	単衣長じゅばん	綿入半天	道行コート	袷道行コート	袷道行コート	綿入羽織	"	"	"	袷羽織	"	"	"	"	"	"	"	"	単衣羽織	胴抜き白下着
二三種	縮緬	錦紗	"	縮緬	麻	唐棧縞	セル	お召 コート地	お召	紋お召	縮子 <sup>りんず</sup>	"	お召	地紋入お召	紗	たて縞	よこ縞	たて縞	変り縞	紗	羅(ら)	お召	羽二重 紋羽二重	
	ちよいちよ衣着	"	"	よそゆき	ふだん着	"	"	よそゆき	ハレ着(よそゆき)	ちよいちよ衣着	"	"	縮緬 という	ハレ着(よそゆき)	"	"	"	"	"	"	よそゆき	"	婚礼用式服下着	
縮緬(一六)	"	"	"	"	美知子	真理子	美知子	美知子	サク	美知子	サク	美知子	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	美知子	
	あり合わせの布を集めて作る	裏は白絹、袖無双、脇ダーツあり、	胸は節絹の小紋染め、	紅絹の裏が映える、友禪模様	袖口と裾にドロワーク模様	裏地には残り布各種使用	三越製(丈は短い) 白木屋製	大正期のもの、黒、羽裏謡曲の図柄 背に織り紋、羽裏はドンス、 黒(やや赤味)三つ縫い紋 黒三つ紋付、羽裏サラサ柄 縞、羽裏はドンス、古いもの	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	松竹梅の紋羽二重、裾ふき四cm白無垢用	
紋縮子(もんりんず)(二)																								

117 116 115	114 113 112 111 110 109 108 107	106 105 104 103 102 101 100 99 98	97 96	95	94 ~
少	物 男	物 男	物		
" 綿入 " " 単衣きもの	印半天 裕 " " 単衣半じゅばん 裕羽織	" " " 綿入胴抜き下着 単衣羽織	" 腹合わせ帯	腰巻(裕)	半襟 (美知子着用)
伊勢崎銘仙	木綿 絹 麻 羽二重 久留米がすり	平絹 紗 絹サラサ 久留米がすり	博多 メリンス	錦紗	錦紗 (11)
よそゆき	仕事着 " " 仕着	ハレ着 " " 着	ちよいちよい着	よそゆき	たて絹 (11)
依助 " 浩一	従業員 " " " " 退蔵 浩一	? " " 退蔵 浪吉 浩一	" " " 退蔵	美知子	よひ絹 (11)
" " " 筒袖	藍染紺無地、背中全染抜き 襟に森田本家 大裁縫い込み、中学生用 白麻の無地 黒紋付(五つ紋)、正式の羽織 黒の三つ紋 (横木瓜の紋) 古いもの	黒の三つ紋、抜き紋 黒の三つ紋、祝儀、不祝儀正式、羽裏サラサ 黒の三つ紋 (横木瓜の紋) 古いもの 紺がすりで学生から三〇歳位まで着た " 羽裏はうすでの金巾	" " " 裏に横布が使われている 昼夜帯ともいい、ともに黒じゅすを片面につかっている		

142	141	140	139	138	137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118
"	女	男	男女	女	男女	女	女	男女	男	"	"	女	男	物	女				男児	少女		用	年	
"	"	"	"	"	"	反物、きもの用	"	"	"	"	"	反物森田名入り	蝶ネクタイ	"	ふくさ	帯揚げ	"	シヨール	オビアケ用祝着	単衣四つ身	"	袴	薄綿入重ね上着	
"	きもの地	単衣用	"	"	"	"	浴衣地	伊香保名入り	森田名入り	"	"	木綿	木綿	浜縮緬	縮緬	羽二重	"	絹	ナナコ	木綿	木綿	銘仙	伊勢崎がすり	
"	木綿	麻	紬	"	お召	木綿	"	"	"	"	"	木綿	木綿	縮緬	羽二重	"	絹	ナナコ	木綿	木綿	銘仙	伊勢崎がすり		
"	袴、胴着、裏	"	"	"	よそゆき	ふだん着	ちよいちよい着	伊香保温泉揃いの浴衣	揃いの浴衣	"	"	揃いの浴衣	よそゆき	"	"	"	よそゆき	ハレ着	よそゆき	よそゆき	"	"	よそゆき	
"	"	"	"	"	"	"	成人	"	"	"	"	森田製糸関係者	退蔵	"	"	"	"	美知子	浩一	真理子	俵助	"	浩一	
金巾か？	白がすり(横糸だけのもの)	プリント染め、広巾のものを並巾にしている	八王子お召か？	縞	久留米がすり、藍染め	紋り浴衣地	藍染の浴衣	湯の花染め、旅館からの贈答か	"	"	白地に紺の花、藍染浴衣	白無地、縞織出し、	白水仙染抜き、三三〇×三三三	柄は千鳥、大きさ三〇cm×三二cm	麻の葉の絞り	表は紋パレス織り	引き綿入、紋付、(抜き紋三つ)	藍染絞り浴衣、長袖	藍染絞り浴衣、長袖	棒縞	胴抜き、袖口布黒八	青たて縞	人形付の袖	



157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	144	143
女	男女	"	女	女	男女	"	女		"	"	"	"	"	"
帯芯	吹止め真綿	"	帯地	"	羽裏	黒きもの	洗張品白生地	"	きもの用	反物白生地	"	帯地	袋帯地	"
木綿	真綿	絹紋織	しゅす	羽二重	お召	絹紋織	縮緬	木綿・絹	絹紋織	絹	絹紋織	絹	絹	絹
帯芯用	きもの用	"	ハレ着	よそゆき	ハレ着	祝着の上着用	よそゆき		"	"	"	腹合わせ帯	袋帯	"
		"	美知子	真理子	"	"	成人		"	"	"	"	"	"
<p>色は藍ねずみ色、草に蜜の刺繍 片側分、幾何学模様織出し 袋帯を片側切ったもの 横縞、腹合わせの片側分 仕立直しのもの たて糸が絹、よこ糸が木綿か？ 江戸小紋(ひょうたん) 松竹梅の紋織り、裾廻し共布、白無垢用 黒無地 本裁ちになっている 紫のしゅす、洗張品、 黒地、麻の葉地紋、柄は絞り染 引き綿入れに使用、吹き止めがしてある。 帯を仕立てる時の芯地</p>														

まとめ

女物 九七点 内訳 きもの(四九)、羽織(一一三)、コート(三三)、半天・じゅばん(六)、半襟(二三)、腰巻(一)、帯(二)  
 男物 一七点 内訳 きもの(五)、羽織(七)、じゅばん(四)、印半天(一)  
 子供用 九点 内訳 少年用(七)、少女用(一)、男児祝着(一)  
 その他 三四点 小物、半襟、反物など  
 合計 一五七点